

### 全三巻の『著作集』

八木秋子を戦後世代に最初にひろく紹介した文章のタイトルは「日れの足跡をけしつゝ生きている昭和のメナキスト・八木秋子」(秋山清『婦人公論』一九七二年五月号)であったことをおもいだす。しほりへんして彼女と、戦後のなかでも一九七〇年世代との出会いを記念する八木秋子個人通信『あはなはな』(編集人相原範昭、小平市花小金井南町三の九二九)と『八木秋子著作集』全三巻(通信「あはなはな」編集、J・O・A出版)の刊行がはじまった。

第一巻「近代の「負」を背負う女」(一九七八年)には彼女が戦前に発表した評論と小説が収められている。第二巻『夢の落葉を』(同年)はあつた木會における幼少年代を描いた物語集である。そして最近出版された第三巻『異境への往還から』は、戦後に書いた作品を集め、安藤の年をほらち一九五九年から六二年にかけての「日記」を収めている。彼女が、読者の心をなやましてきた「足跡」はこれだけで余す代りなく拾われた。

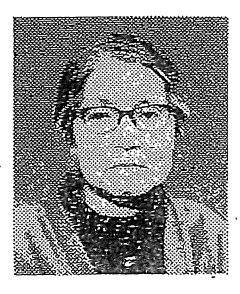
もっとも著作集にもあられるのは決して連続と集積とはない。収められているのは彼女の生涯のさまざまな時期の生活に

密着した文章であるが、重要な地点にこそかかると文章は途切れ、あいだにけしつゝの無い大きな空白が残されている。幼少年期の後にあつたはずの四年の結婚生活についても置いた家出離境について触れた文章はほとんど無い。

切れている。恐怖のあまりで廃弊した農村に農民自治のコンミューンをつくり出す農村青年社運動をおこして、実践活動に入ったからである。だが資金つへるを目的とした窃盗事件がおこり、運動は破綻し、逮捕者となった。事件後、農村青年社は解散したが、関係者は再び逮捕され、彼女も治安維持法違反に問われて下獄している。出所後、満州(現中国東

## 八木秋子の軌跡

### 戦前戦後の思想風土に抗し続ける



八木 秋子さん

北都(に渡)って満鉄の留守者相談所に勤務しながらは母子寮の寮母となつて一九

六二年六十七歳まで働いた。退職後八十一歳までは生活保護をうけながら四畳半の部屋でひとり暮らしをした期間が長かった。一九七六年、東京都立養育院に入寮、現在は八十五歳であ

書いた作品も忘れて新しい出発をした。日本の近代の女たちの多くは家出を出発点として自身を確認し、彼女たちにもつと多くの家出小説が書かれたのだが、彼女は書かなかった。書かなかったのは家出が自分の家出にならずに捨てての孤独な脱出であり農村青年社事件について

も最後の離脱は「幽囚の愛人をしき離」す冷暗な行状で自己を覚されたからである。だが彼女は井筒をちやちや沈黙を待たせるとしてのなほ、あつたまの理由がいく深淵を「無頼の世



西川 祐子

八木秋子は生涯にいくつも手を掲げて集団を離れ一人別れる。

豊かな空白の部分だが針黹された伝統的大作は作品として結論しえなかつた。彼女の客観的な眼をもち腰をすえて婦人作家たうとしてながら、なお行動にひびいてゆへ生き方をかえなかつた。「日記」には別業を生きてゆへ創作のうきやむやむの間を激して

「とよみ」これを諷くのが文筆たを纏ったことがある。彼女が自の行爲の必然性を追究し、自分でなければ書けぬものを書くことと養ひの生涯を賭けようと決心したのは著作集第三巻にあつた「日記」の時期であつた。

は著作集に集められては読まねばならぬところを「説的」な「本」である。わたしたちがこれを讀み、彼女の軌跡を追ひつゝあつたのは、戦前と戦後の近代、日本の風土に抗して生きてゆへに彼女の存在に強

心(書)

# 随所に「自立への強い意志」

全三巻 八木秋子さんの著作集完結



八木秋子さん

衰と退歩に抵抗して生きる姿勢は、今も続いている。

五十三年に刊行された第一巻「近代の八負」を背負う女」は、昭和初期に「女人芸術」「婦人戦線」「種蒔(ま)く人」などに寄稿した評論や小説が主な内容。そのなかの「一九二二年の婦人労働祭」や「ウクライナ・コミュニオン」などを戦前読んだという作家の堀谷雄高氏は、八木さんのもの「本質的な先駆性」が現れている、と言っていた。

第二巻の「夢の落葉」は、昭和

和十年代に寮母をしながら底辺を見詰めた目とふるさとの木曾への思いがないまぜになって書かれた長編。幼児期に親、きょうだいから受けた数々の影響が自伝風に描かれている。

八木さんは戦前のアナキストの運動である「農村青年社」の関係で投獄された。その後、満州に渡って、働きながらさまざまな交友

関係を持つ。ソ連の参戦で満州が大混乱になる日々は、第三巻「異境への往還から」にくわしい。

「永島暢子さんの憶い出」「満州引揚げ記」「満州最後の日」などに書かれた動乱の経験を経て「私は生きたい」「火は消えない」など、戦争の後遺症を負った母と寮

の人びととの交わりまで、ちょっとした表現にも八木さんの強い自立の意志がうかがわれるものだ。

三十四年から二年間の日記、つまり六十五歳前後の実生活の記録も収められているが、その「老い」への対し方は、目をみはらされるだろう。

(第一巻 二〇二円、一、三〇〇円、第二巻 三三四円、一、八〇〇円、第三巻 二八七円、二、〇〇〇円。JCA出版 東京都千代田区神田神保町一ノ四二、日東ビル)

戦前「女人芸術」や「婦人戦線」などの女性雑誌で、高群逸枝、平塚らいてうらと共に

論陣をはった、八木秋子さんの著作集全三巻が完結した。

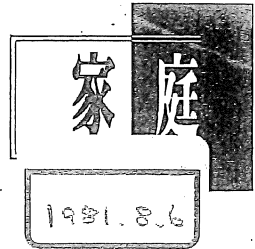
現在、八十五歳の病身を東京都

立養育院に横たえる八木さんの若い友人、相京範昭さんの個人的な努力で実った自立の軌跡である。戦後、満州から引き揚げてのちは、母子寮の寮母をしたりしてひっそりと働いていたが、その「老

共同通信

1981 7/8

中村輝子



戦前「女人芸術」や「婦人戦線」などの女性雑誌で、高野逸枝、平塚らいてうらと共に論陣をほった八木秋子さん（本名福島町出身）の著作集三巻が完結した。八木さんの個人通信「あるはなく」を編集してきた相京節昭さん（三三）の努力で実った、信じる道をひたむきに生きてきた女の自立の軌跡である。

八木さんは現在八十五歳。東京都立の養育院で、病身を横たえ、自らの老いを向き合つ日々を過している。その八木さんと若い親友相京さんが出会ったのは、昭和五十年のこと。「二月月に一回くらい八木さんの四畳半を訪ねて話を聞いて



ることはないかと、翌年の夏から、八木さんの個人通信「あるはなく」の刊行をはじめた。

### 八木秋子さんの著作集

## 自立の軌跡、3巻 親友の支えで完結

五十三年に出版された第一集は、昭和初期に女性雑誌などに寄稿した評論や小説が主な内容。第二集は、戦後、母子寮の寮母をしながら書いた作品が中心。



八木秋子さん

心で、ふるさと木曾の風俗や人々の暮らしが、自然ぶつに描かれている。第一巻の刊行から二年半ほどかけて出版された第三巻には、戦前のアナキスト運動「農村青年社」の関係で投獄され、その後満州（中国）に渡った八木さんの満州での思い出や引き揚げ体験、母子寮に身を寄せながらも、たくましく生き抜こうとする母たちの記録、六十五歳前後の美生活をつづった日記などが取められている。どのような場面でも、自立を強く希求する生き方には、目をみはらされる。いま、個人通信「あるはなく」は、「八木さんの生の声を

伝えるられなくなったので」二十五号で休刊。今後二回にわたって八木さんの原稿や手紙、読者からの手紙などを構成した、休刊号「をだし」、「あとは、老い、奇蹟を待つて刊行していき

い」と相京さんは語っている。（「近代の八負」を背負う女、千三百円、「夢の落葉を」千八百円、「異境への往還」千二百円。ICA出版、東京）二、日京ビル2F刊

異境への往還から

— 八木秋子 著作集Ⅱ —

八木秋子著

著者は一八九五年生まれ。若い頃雑誌記者、教師、新聞記者などを経て『女人芸術』『婦人戦線』の編集に参加。その後アナキズムの実践活動で逮捕され、出獄後渡満、満鉄に勤務した。敗戦で引揚げ後母子寮の寮母として勤務、五年前より東京都養育院に在住している。



この著作集は、著者のアナキズムの思想と生き方に共感する相京範昭（編集担当）が、彼女の養育院入りを機に発行を始めたもの。本書に収録されているのは、戦後発表した文章、彼女がかかわった「土曜会」の会報の文章は、母子寮時代を中心とした日記などである。著者の格闘ともいえる対象（人）との対し方、それを客観的に見詰める姿勢などは、我々の心を打つものだ。（A5判・二八七頁・

二〇〇〇円・JCA出版）

'81. 8. 上

出版ニエス

1981.8.上旬

子寮養母の記録など。

# みずみずしい 老いの記録

異境への往還  
から

八木秋子著作集Ⅲ

後半の一九五九年六月二十九日から、六二年一月十一日までの日記が、とくに興味が深い。六十歳の女性のこのみずみずしい感性の動きはどうだろう。芸術への飽くなき憧れ、豊かな人間性、日常に忙殺されて失いがちなそれらをたっぷりもって、思うままに生きていく姿はうらやましいようだ。

六〇年六月十一日には、婦人民主クラブ第十五回大会が参議院会館でひらかれたのを傍聴して、祐天寺支部の石川すすさんと国会一官邸—米大使館へデモにゆく。

一九三八年、満鉄新京支社にいた八木秋子は「女人芸術」時代の友だち永島暢子を迎え、敗戦までの交友がつづく。ここに在満邦人ものもの考え方、満州の人びとにたいするやり方などが、じつに生き生きと描かれていて、すぐれた記録文学だ。悲劇的な暢子の死までをもっと掘り下げて書かれたらと惜しまれる。

朝鮮に通つての引き揚げから、敗戦直後の混乱、長くつとめた母

JCA出版刊 二〇〇〇円  
(連絡 小平市花小金井南3の9  
29 相京範昭)

